

妹に びびりじめ!

小説 倉田シンジ

挿絵 ねみぎつかさ

ストーリー原案 茶瓶

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

序 章

妹がいるのは幸せなこと？

006

第一章

妹とカノジョ

015

第二章

キスはまだ早い

042

第三章

ゆつくりしてはいられない！

081

第四章

曇りのち晴れ？ 晴れのち曇り？

121

第五章

ハッピーバースデー

167

第六章

兄と妹と恋人と

204

登場人物紹介

Characters



あさくら な つ み
朝倉奈津美

真也の幼なじみ。陸上部所属のスポーティー系ボクっ娘。

たちばな

橘ハル

性別は女で外見も悪くないが、性格が変態的で残念な子。



おおさわゆきの
大沢雪乃

おとなしく慎重しやかで可憐な少女。真也の妹にあたるが、兄依存症で暴走することも。

おおさわしんや
大沢真也

流されやすい性格な雪乃の兄。シスコンを自認している。

「んんっ! や、やめ……うあ!」

カリ首の敏感な部分が集中的に責められて悶絶していると、亀頭の先っぽにもう一方の手の人差し指があてがわれていた。クリクリと撫でられる鈴口からゾクリとする痺れが湧き上がって、ベッドから投げ出した足がひくついてしまう。

「くう……ゆ、雪乃、おまえどこでこんな……! うわわっ!」

くりゅ、ぷちゅっ……。にち、ぷちゅ、にちにちっ。

カウパーが滲んだ先から指先に潰され、敏感な筒先がこねくり回される。

「いろいろ調べて勉強しました……兄さんのためだけに」

エッチなゲームで得た基礎知識を広めるべく、兄の部屋のパソコンを使って集めた知識だった。まさかこっそり保存しておいた秘蔵ブックマークが妹の性知識に反映されているとはつゆ知らず、真也は目を白黒させてペニスを跳ねさせる。

にちっ、にちっ、ずちゅ、ずりゅりゅっ……!!

それをしつかり握って片方の手を上下させ、もう一方で亀頭を集中攻撃。傘の広がった先端部はますます充血して、透明な汁をぷちぷち溢れさせている。

「兄さんのお汁……気持ちいいから出るんですよね……?」

「そ、それは……うあ!」

答えを待たず、鈴口から滲み出たばかりの雫を……ぺろりと。温かくて柔らかな感触が亀頭を滑った刺激に歓喜して、肉茎がどくりと脈を打った。

（い、いま舐めた……よな？ あの雪乃が俺のを？ これは夢じゃないのに？）

いまだにあの夢が実際に現実であったことだと知らない兄は、それにひどく驚き、興奮してしまふ。むしろ、ようやく夢が現実に繋がったというところだろうか。

それを感じてか、雪乃の中にあつた控えめさが消え失せる。さつきまでは確かにあつた恥ずかしさが、兄への奉仕欲に塗り潰されていくのが表情に浮き出ていた。

拭つても拭つても溢れてくる先走りを舌先に掬い取りながら、雪乃は腰掛けた真也の両足を開き、その間にじりじりと身体を滑り込ませてくる。兄の性器にじつと注がれる視線が、それを温めようとするかのように熱っぽい。

「んっ、兄さんのおちんちんを思い浮かべて……ちゅぷっ。はあ、ん……イメージトレイニングしたんです……くち、ちゅるるっ。たとえばこんなことも……」

股間に寄りかかるようにして顔を寝かせてきた。舌は亀頭から裏スジを通つて肉の胴へ。そして根本へ到達すると、そこから茂みをかき分けてさらに下へ。

「んっ、はあああ……む」

つうう……っ、ぴちゃ、ちゅぷぷぷっ、くちっ、にちいっ……ちゅぱっ！

（うく、ああっ……!? そこ、俺の玉袋……！ 唇の感触が……！）

感覚の薄い薄皮に包まれたしわの袋が細指に支えられ……どうしてか一気に鋭敏な部位に変化する。フニフニの唇が触れてそよぐようにくすぐるたび、しわをなぞる動きで指先になぞられるたび。腰の奥にモヤモヤしていたものが変化して、チリチリした火花を

散らす感覚に。頭の中には被虐的な感情まで流れ込んでくる。

(雪乃ってこんな表情をする子だったっけ……？　いつもと全然違う……っ！)

こちらの心の中を探るような上目遣いが飛んできて兄の心をかき乱す。

すでに背徳感は後退し、奉仕される喜びや、嗜虐感と被虐感が表裏一体になって前に出る。そしてなにより、肉を疼かせる性の快感が。

「はあ、はあ、はあっ、く、うっ……雪乃っ……だ、だめだつてば……ううっ」

ちゅぱっ！　……くちちっ、ぴちゃ、ぴちゃ……。

ようやく言葉を出してみても乱れる息に邪魔されてうまく紡げず、淫らな水音に邪魔されてしまう。その代わりにペニスが、与えられる刺激に素直な脈動を繰り返していた。

ちらつと兄を見た妹もそのことを理解してか、あるかないかの兄の制止よりも性器の反応に素直な行動に出る。

陰囊が手の平に掬い上げられ、やわやわと転がされた。

「あうううっ！」

妹の手の上に乗せられてだらしく広がった薄皮が、上下の花唇に挟まれて食はむように引き伸ばされ、舌先にチロチロと悪戯される。ちゅうううっ、と音を立てて唇に吸い込まれる。ひととき大きくペニスが跳ねて、カウパーが妹の顔にピタピタと降りかかった。

「あっ、兄さんったら……。コレが、んっ、む……。そんなにいいんですか……。？　んっ……ちゅ、ちゅば……。んっ、ふ……。気持ち、いいんですよね？」

玉袋に唇を這わせる合間に囁きかけてくる。嬉しそうに目を細めて、妖艶にうつすらと笑みを浮かべて。雪乃は答えを欲しがっているようだった。

（俺たちは兄妹なのに……こんなことしちゃって……っああっ！ お、俺はどうすりやいいんだよ、うううっ……！）

見下ろす視線が、妹の問いかける視線と交差する。

「もっとしてほしいですか？ それならはつきり言ってください」そんな雪乃の言葉が脳裏に直接伝わってくる……。

兄を試すようなその視線に、ついに真也は負けてしまった。

少しだけ言葉に詰まったあと、コクコクと頷きながら口走る。

「きつ、気持ちいいっ……。雪乃がしてくれると思っただけでも……ううっ！」

「……はい」

張りを増してビキキッと脈動するペニスの感触に、妹はさらに手を動かした。まるで「早く出してください」と急かされているようだ。

陰囊を伸ばした舌先でううっつと舐めくすぐりながら、肉棒を握った手の平はまわりつくように指を絡めてくる。

肉棒の先端からとぷととぷつと滝のように先走りが垂れていった。それは上下にしごかれる織^{せんしゅ}手でにゆるにゆると淫らな音を立てて塗り伸ばされてから、玉袋に這う舌に掬われて唾液と一緒にまぶされる。

「っは、雪乃、あの……っあ、もうっ……!!」

子供がおしっこを母に訴えるような、なんだか情けない声で切迫感を訴えてしまった。すでにペニスの反応から射精の近さを感じていた雪乃は、その絡みつくような視線で応えた。顎を浮かせて喘ぐ兄を見上げ、瞳で「出しているですよ」と排出を促す。

（雪乃っ、いいのか……？　ううっ、もうダメだ、出しちゃうからなっ……!!）

こまごました感情が押しやられ、妹の手で射精に導かれる幸福感だけが身体中に満ちていく。夢と違って遥かにリアルな快感が背筋を駆け上り、腰の奥をじんわり熱くさせるのがたまらない。もう、我慢したくない――。

「兄さんっ、出して……。私の手の中で出してください。いっぱいっ……!!」

声に引き寄せられて見つめてしまった妹の顔は、奉仕する側なのに切なそう。眉尻を下げ、頬を染めて、なのに這い回る赤い舌は兄を責めることを楽しむように妖艶で……。

びくびくっ！　と、ペニスが内部に精を駆け上らせていく。それと同時に。

にちゃ、くちゅっ！　ちゅ、ずるるるるっ……!!

肉棒が手の平にぎゅうっつと締め上げられ、陰囊がひとときわ吸い上げられた。

「うあああああっ！」

頭の中にあつたものがすべて吹き飛ぶ。なにも考えられず腰を震わせた真也の目に灼熱の光がまたたき、それらをすべて凝縮したような、すさまじい勢いの白濁が噴出した。

どぶううううっ！　どびゅるっ！　どくどくっ、ずびゅ、どぶぶううううっ！



「昨日みたい……私の中に入りたいですか？」

「ぶっ……!!」

思わず吹き出す兄を見てクスツと微笑んだ妹は、なんだか魔女のように見える。

「私は……したいです……」

「おまつ、お前はなにをつ……」

つい大声を出しそうになって慌てて声のトーンを下げる真也。昨夜から今日にかけて、雪乃と分かり合えたような気がしたアレは、どうも錯覚だったらしい。

妹は、昨日感じた以上に小悪魔的だ……。

「でも、ここじゃ狭すぎてさすがに難しいです……よね」

お尻がぎゅつと押しつけられてから、名残を惜しむように離れていく。ホツとしたのもつかの間、さわつ、と微妙な感触が股間に走った。

（まさか雪乃、手で……！　いくら挿入は無理だからって、ここ電車の中だぞ……!!　人だっけっていいのに……!）

誰かに気づかれていないかきよろきよろしてしまつて、

「兄さん、そんなにしてたら気づかれちゃいます」

慌てて俯いた。学生ズボンにくつきり浮き出たペニス、後ろ手に差し伸べられた纖手になでなでされているのが見える。

「あの……雪乃。いくらなんでも電車でこういうのは……」

真っ直ぐヘソに向けて盛り上がっている男性器が、ゆっくりした動きになぞり上げられてひくついてしまう。自分の下半身を情けなく思いながらそう提案してみるが。

返ってきたのは無情な答え。

「だって、もうこんなになっってるじゃないですか……。兄さんが外で変なことしないように、私がお世話しないといけないんです……」

ズボンのジッパーが捉えられてしまった。ゆっくり引き下ろされていく。

真也は、ずるい、と心の中で呟いた。こんなふうにしたのは雪乃なのに……。

「じゃ、失礼しますね……」

それに……。あくまでも事務的な口調な割に、妹の伏せた眼差しは昨日のベッドで見たものと同じ。妙に熱っぽくて、潤んでいて……。

「うお……！ ああ……とうとう……」

ぶるんと飛び出たペニスに同情の視線を向ける真也。とはいえ……。電車内で性器を晒してしまうという異常な行為に、頭の芯が熱くなってきた。

（なんで俺も興奮しちゃってるんだよ……。うう、情けない）

するつと絡みついてきた指に歓喜の吐息を漏らしてしまう。どうにも収まらない。

斜めにそそり立つ肉棒につつと指先が躍り、裏スジを圧迫してから包皮をかぶった先端部へ。半分だけ顔を出している亀頭が指先でくりくり撫でられている。

「こ、こら……。くっ、くすぐりたいっ！ い、悪戯するなよ……」

視線を左右に動かして周囲の状況を確認しつつ、腰を引いてビクンビクン脈動を強めるペニスを逃がそうとする。

しかし追いつがった指はさらに亀頭を押さえ込みながら、ぎゅっと握って引き寄せるように。誘われた腰を前にせり出してしまつて、ずりりと包皮が剥けて先走りが広がる。

「はあう、ゆ、雪乃……お」

ねちよねちよにされた鈴口が指先でいじられている。すっかり敏感にされてしまった亀頭が熱くなつてきて、息の乱れを整えることができない。

「なんですか？　どうかしましたか……？」

雪乃が悪戯っぽい視線を投げてきた。……それでも。

「なっ、なんでもない、ぞ……！」

ハッとして兄の威厳を取り繕い、ぎゅっと口を引き結ぶ。

（ここは屈するわけにはいかないぞ！　いくらなんでも、電車でこんないやらしいことをするなんて……）

なんだかちよつと気持ちいい。

（いやいやっ！　そんな変態めいたこと、俺は断じてっ!!）

必死の抵抗を続ける真也だが、その葛藤を見透かしてか雪乃の指が動く。

握り込まれ、角度を押し下げられたペニスがスカートを潜るようにして中へ。柔らかくてぷりつとしたお尻に、にゅるるるつと先走りの跡がのたくる。

「あつ、あれっ？　なんで……!!」

「うふふっ……。生の方が、兄さん喜ぶかと思っただんです……」

慌てて下を見ると、雪乃の空いた手が薄布を指に引っかけていて……。ショーツをお尻の下端まで引きずり下ろしている。スカートは中途半端にまくれているだけなのでよく見えないけれど、亀頭に感じる感触は間違いなくなめらかな雪乃の白肌……。

（うっああああ……！　先っぽに、ぷにぷにが……！）

押さえられたペニスが円を描くように動かされている。

「それに……。昨日はあんなことしちゃいましたし……」

尻房に亀頭を押し当て、ぬるぬる擦りつけながら、

「なのに……。今日は手だけじゃ、寂しいかな、と思つて……」

そう囁いて、妹の手は肉胴をしめるしめるとしごき上げるや切っ先を移動させる。

亀頭が左右の尻房にぶつかりながら、その真ん中の狭い隙間へ……。

（もしかして……。ここに挟む気が……。!!）

先端がぴったり寄せられた太腿の壁に突き当たってしまったが、すぐに少しだけ隙間が開いて、そこへぬるる……。つと。ふにふにの内腿が左右から締めつけてきた。

「んっ……。兄さんも、動いてくださいね……」

「じゃないと困ります」と拗ねたように囁く雪乃。困っているのはこっちだ。

（そ、そんなにきつく挟まなくても……）

カウパーが滲み出て潤滑剤になってくれなければ、ギチギチに挟み込まれたペニスは全然動けない。それほどの圧迫を与えながら、わずかに妹の身体が動かされる。

「うううつ……」

ずにゆううつと、ひっぱられるような感覚。意外とスムーズに摩擦されている……と思ったところでようやく、じんわり温かなぬめりに気づいた。

（雪乃も濡れてる……？）

好奇心に負けて、周囲に見えないように身体で隠してスカートを持ち上げてみる。

「あつ、兄さん!? ……も、もうつ……」

（うわ……! すごい、ぐちよぐちよじゃないか……!）

真也の先走りではない透明な液体が……太腿に雫を作って垂れ落ちていた。

その量は昨日の秘め事に負けないくらい。太腿にまで垂れるくらいだから、アソコはすごいことになっているんだろう。

（電車の中だから……か？ 雪乃も興奮してるのか……？）

日常風景の中での卑猥な行為というアブノーマルな体験に、この妹ですらいやらしく身体を火照らせているのだ。それはなんとなく新鮮で、余計に興奮する事実だった。

（俺だって……さ、触っちゃうぞ……）

真也の頭に、ピコン! と電球が光って名案が浮かんできた。

（よし、俺も雪乃を責めちゃおう……。そうすればこの状況のヤバさに気づくはず……）

だいたい、さつきから自分ばかり周囲に気を遣って不公平だ。これくらいは許される。そっと伸ばした指先を尻の割れ目にあてがい、そのまま奥へ。

「んんっ!! に……兄さん、そこは……っ、ふぁ……」

（ここは……お尻の穴だな……）

肛門のすばまりが指に触れている。少ししつとりとしていて、きゅつとへこんでいて……。普通なら一生触ることのなかった部位を撫でると、妹の肩がひくつと震えた。

「う……兄さん……っ」

「わ、分かったから睨むな」

自分は好き放題してくるくせに……なんて思いながらさらに奥へ。そのまま手を引つ込めると思っていたのか、雪乃がまたびくつと肩を揺らす。

だが、今度は文句の代わりに……、

「やつ、んぁ……! はぁ、ふう……さ、触っちゃダメです……っん!」

甘い喘ぎが口から漏れだしている。

（ここが雪乃の……おま○こ……。すごい、こんなに柔らかくてぐちよぐちよだ……）

昨日はペニスでしか触れることのなかった秘所の感触だが、指で触れてみるとなおさら柔らかく感じられた。指でくにと押してみる……。

「ひゃ……! に、兄さん、痴漢さんみたいですよ……」

ようやく調子を取り戻した雪乃だが、こちらを覗き見るその瞳は切なげに揺れている。

ペニスを挟みつばなしの太腿がふるふる震えていて心地いいくらい。

（えっと、ここが割れ目になってて……ということとは……）

指先で形を把握しようと試みる。

左右にはぷっくりした大陰唇の丘があつて、ふわふわした恥毛に守られていた。そこを押し開くと、にちゃりとした音とともに愛液が垂れ落ちてくる。

「うわあ、ドロドロだ……」

妹の刺すような視線を受け流しつつ、指先を割れ目の中へ。

ぷりつとした小陰唇に指先が触れて、形を確かめるようにぷるぷると弾く。

「んっ！ はあ……はあ……、兄さんに触られていると思うと、私……っ」

すくめた肩がまたしても細やかに震え、膝が砕けそうになっている。真也はそれを支えるためにもう一方の腕を伸ばすと、制服を膨らませている胸元に手を忍び込ませた。

（ドア側を向いてるから……周りには見えないよな？）

素早くボタンを外してブラをずり上げ、ナマの乳房をにゅつと絞り出すように掴んだ。

「んっ、はああああ……」

太腿をよじらせてドアにもたれかかる妹。その尻がわずかに浮いて、綻んだ膣口に指が引つかかる。くにゅつとした感覚が指の第一関節までを呑み込んでいた。

（中も柔らかい……どんどんぬめりが溢れてきて……）

くぶ、ちゅぶぶ……にち、くぶぶ……ちゅ。

「あつ、そんなにっ……かき混ぜてはっ、ふあ、あは……あああ！」

滴りをかき出すように動かしただ指に痺れを走らせた雪乃が、ぐんと背を反らして喘ぐような声を上げてしまう。

「わっ、わわわ……やばい、気づかれるって」

慌てて周囲を見回すと、近くの何人かがきよろきよろしている。ただ、幸いにもその声にはつきりと気づいてしまった乗客はいないようだ。

（むう……でもこれじゃそのうち気づかれちゃうな……）

本音を言えばもうちよつと指で探検してみたかったけれど。仕方なく手を離れた。

雪乃が上気させた頬を膨らませて、じとつとした目で睨んでくる……。

「兄さんたら。ひどいです……」

「あはは……は。……ごめんってば……」

残念だが、とりあえずこれで妹もこの危険な行為をやめてくれるだろう。

……と思ったのだが。

「やつぱり兄さんはなにをしでかすか分かりません。私がしっかりしないと……」

なんて言いながらショーツを穿き直した雪乃は、締めつけた太腿をモジモジと。

（えっ、え？ えええっ？）

愛液まみれの内腿肉にニルニルと揉み擦られたペニスが、少し角度を上げて足の付け根へと。ペニスの上側に、ぴとつと熱い感触が触れてきた。

べつとり粘液を吸って肌に貼りついた下着は、布越しにもかかわらずナマの感触を伝えてきた。割れ目の存在どころか、充血した陰唇のプニプニした柔らかさまで……。

「んっ……。入れるのはダメです……。周囲の人に気づかれちゃいますから……」

「いや、それは俺のセリフだ……。っつて、くううっ……。こ、擦れるっ……。！」

雪乃の身体がゆるめると前後に動き出す。

振幅はせいぜい十センチかそこらなのに、密着部分がにゆるりと滑る感覚に悩乱させられてしまう。しかも淫らな音がかすかに響いて、耳からも真也を誘惑してくる。

（挟まって……。ううっ、口で吸い絞られてるみたいだっ……。！）

雪乃が身体を前に動かす。左右から挟み込むような大陰唇の厚みと……。ぷにゅっとうひしやがるような感覚は小陰唇のヒダだろうか。それらがねっとうりした液体で貼りつく感触を残して亀頭の方へ。

そして今度は後方へ。布越しにもハッキリと感じられる、ぬるつく粘膜や陰唇のヒダが……。逆の刺激を与えながらペニスの根本まで。お尻をくつつけるほど引かれた腰が、太腿で肉棒をきゅっと締めつける。

「くぁ……」

自然と腰が前に出ていた。二人ともそんなに大きな動きはできない——だからこそ、真也も動きのタイミングを合わせる必要がある。

すっかり妹のペースなのは、もはや言うまでもない。

（だって、こんな……こんなことされたらもう……！）

ぐいっと押しつけた腰がぴったり密着すると、太腿と恥丘の隙間を通り抜けたペニスは亀頭を前方に突き出させる。

雪乃は視線を下ろし、てらてらとぬめり光って自分の股間から顔を出した先っぽを指先で支えてくれる。……敏感な鈴口や裏スジをコリコリと擦りながら。

「うあ……！ そ、そんなにしたらすぐ……！」

「うふ、ふふっ。もし出したくなったら、あふっ……んっ、出して、いいです……」

振り向いて途切れ途切れにそう言ってくれる妹だが、なんだかその目元は妖艶な雰囲気漂わせていて……兄への悪戯を楽しんでいるように見える。

だから余計に意識してしまう。ここが電車の中であることや、自分が妹の手の平で踊らされているという被虐的な感覚を。

ずにゆるるる……ぷちゅ、くちち、にゆるるるっ……！

「なんだか、だんだんうまくなってます……んっ、私のアソコに、擦れてきて……」

ほうっと吐息を漏らしてドアに手をつく雪乃。

確かに自分でも思う。ひと擦りごとに角度の調整がうまくなっていて、突き込むたびに薄布越しのヒダや膣口をずりずりと摩擦しているからだ。

「ゆっ、雪乃のココが気持ちいいから……っう、はぁ、はぁ……！」

妹の恥丘はいじられたせいか充血している。膣を守るように左右に付いた小陰唇はプリ

プリしていて、綻んだ膣口も入り口を広げて引つかかるような収縮がある。それが下着越しにねちやねちや圧迫してくるのが気持ちいい。

まして、垂れ落ちてくる愛液に摩擦地帯はすっかりドロドロ。すべらかな内腿は吸いつくような張りがあつて、それがヌメヌメの感触を加えて締めつけてくるのだから。

にちやにちやと蠢く肉の天井が亀頭を擦り、太腿の締めつけに肉胴がしごき上げられる。びくつと脈動して先走りを漏らせば、指先でそこをクリクリほじられて……。

「っ、うあ！ はあ、はあ……っ！」

「ふあ……んんっ！ おちんちん、ビクビクして……。射精しそうなんですか？ ほ、本当に、電車の中で……んんっ！ 出しちゃうんですか……？」

今日の雪乃はまるでいじめっ子だ。

自分だつて感じて泣きそうな顔をしているくせに、兄にそんな言葉を投げかけてくる。

（ここまでしておいて、そんなこと言われても……うううあ！ 出る、出るっ！ もう我慢できないって……！ 出しちゃうぞ……！）

小刻みに腰を揺らしながら、妹を抱き寄せてその背を包み込む。ぎゅつと掴まれた乳房の感触から射精の近さを感じ取った妹も、ふるるつと身体を震わせて。

にゅぶぶっ！

思いきり突き込んだペニスが妹の股間から顔を出し、鈴口がぶくりと膨らむ。とどめのように雪乃の指が絡んできて、亀頭をにゅるりと掴み込む――。



ぐつと歯を噛み締めた瞬間。

どぶぶ！ どくん、どくどくどくくつ！ ぴゅぴゅううつ！ どぶううつ！

「んっ……！」

妹が手で精液の本流を受け止めようとしてくれたらしい。

しかしビクビクと跳ねるペニスは言うことを聞かず、その手の平をすり抜けて……宙に放物線を描いてドアに降りかかっていった。

びちゃびちゃっ！ とドアに貼りついて、ゆっくりしたたっていく大量の白濁液……。

「ああ……兄さんってばもうっ。これじゃ……」

「う、ヤバイ……。匂いが……」

むわーんと広がり始めた精液の匂い。雑多な音に満ちた電車内では、小さな音ぐらいに反応する者は少ないだろう。しかし、さすがに匂いは注意を引いてしまう。

（さすがにこれはまずい……！ だ、だから俺は言ったんだよ……！）

と妹にアイコンタクト。「なんとかしてくれ」との願いを込めた。

しかし雪乃からは「兄さんが元氣すぎるから」とでも言わんばかりの叱責視線。自分だけコソコソと服を整えている。

（ず、ずるいぞ雪乃……！ ああああ、もうっ！）

萎え始めたペニスを慌ててしまいこみ、必死に知らん顔をしながら……。

真也は長い溜め息をついた。

※

さすがに今朝はやりすぎたかな、と思いながら、雪乃はお弁当を開いた。

本当は兄の教室に押しかけて一緒に食べたいけれど……。

今頃、兄と奈津美さんは一緒に屋上にでも行ってお弁当を食べていることだろう。

二人の交際を認めているという建前がある以上、あまり邪魔をするわけにはいかない。私は私なりのやり方で、兄さんを取り戻すだけ。

でも今朝は、やっぱりやりすぎだったかもしれない……。

（だって、兄さんがあんなにたくさん出すからです……）

予定が狂ってしまつて、駅に着くまでは大人しくしているしかなかった。本当はもっとじっくり、兄さんに気持ちよくなつてほしかったのに……。ふう、と溜め息。

……とはいうものの、計画は順調。

（だって昨日はどうとう兄さんと……。ああ、夢みたいですよ……）

むしろ順調すぎるくらいかも。このままいけば、もうすぐ……。『兄さんを奈津美さんから取り戻してひとりじめにしちゃう計画』は成就する。

（うふふつ、兄さんたらあんなに緊張してました……。まあ、私もですけど……）

とにかく、奈津美より一歩も二歩も先を行っている自信がある。

なのに――。

（いつ告白したらいいんでしょうか……。例のことを……）

キスの合間に喘ぎながら、しかしぎゅっと抱きついてくる腕には真也を放すまいとする意志が見える。痛みに負けまいとする姿がいらしい。

（うあ……中がキツイ……っ！）

腰はゆつくりと進むが、その締めつけは妹に感じたものよりも激しい。雪乃の中はまわりつく感触が強かったのに対し、奈津美はぎちつと締めつけられる。両者ともそれぞれ違った感覚を与えてきて優劣つけがたいが、少なくとも破瓜進入においての困難さは奈津美の方が上。このままでは動くのとはばかられる。

どうにか三分の二を押し込んだところで動きが止まった。

真也は口付けを交わしながら彼女の胸に手をやり、もう一方は股間へと這わせた。

「うんッ……あは、む……！ ふう、しんやあ……くふ、ンンッ！ そ、そんなにしひやらあ……んむ！ はあ、は……ううっ！ おっぱい、ひやめえ……っ！」

口も両手も総動員で、それぞれの弱点を責めいじる。痛みと快楽で混乱気味なのか、奈津美は目を泳がせて顎を反らせているが……苦しがつている様子はない。

呼吸を阻害しないように軽めのキス。唇同士を擦り合わせたり、首筋をつつと舐めてみたり。奈津美は瞳を震えさせて、喘ぐように吐息を漏らした。

「んっ……動くからな。我慢できなかったら言えよな」

弱音を吐くような性格ではなさそうだけれど、一応そう言うってから腰を押し進める。目論見通りさつきよりも抵抗が緩んでいるのか、ぐちつと音を立てて亀頭が沈んでいく。

やがてすべてが埋まった時、くにと先端がへこませたのは子宮の壁だろう。

（やっぱり締めつけがキツイ……。入り口と奥の方と、手で握られてるみたいだ……）

括約筋に連動して膣内はぬめついた粘膜で強烈に締めつけてくる。きゅっと押し寄せる媚肉の蠢きは、気を抜けばすぐ射精してしまいそうなほど。

「すごい……ボクの中、奥まで真也でいっぱいになってる……。入っちゃったんだ……」

彼女らしいけれど、直球でんだかこそばゆい言葉。だけれども、繋がり合ったという充実感をこれ以上ないくらいに与えてくれる嬉しい言葉だった。

（よし、今度は引き抜きながら……）

左手を乳房の上へ。五指で集めたぶにぶにとした柔肉を、キュツキュツと絞り上げながら最後に乳首を捉える。さつきよりコリコリしているしこりを指の腹に押し当てて、転がすように、あるいは押し込んで擦り立てる。

「あんっ、はあ、うううんっ！ おっぱい、弱いって言うてるのに……いつっ！」

（そ、そんなこと言いながら自分だって……！ うわ、絞られるっ………！）

乳房をいじるたび、膣内がうねって締めつけが移動しているような。ぬるぬるした粘膜で揉み廻られるような気持ちよさに、さつきからペニスがひくつきっぱなしだ。

ようやく亀頭あたりまでを引き抜いて一呼吸、くぷつと溢れ出る愛液には破瓜の赤さが紛れているけれど、彼女の表情からはさつきより緊張が薄れている。

（それなら……俺もそろそろ我慢が利かないぞ……）

思いきり動きたくてしょうがない。

再挿入を伝えるようにクリトリスを押さえ、コリコリと責め撚る。と同時に……。
にゅるるるっ！　ぷち、ぬる、ぐちちちっ！

「あっ！　ふうんんんっ！」

相変わらず強い締めつけがペニスを迎え入れる。ただ、さっきまでの拒絶めいた圧迫はもうない……これはむしろ男を迎え入れようとする締めつけだった。

「奈津美、すぐ気持ちいいな……。きゅつきゅつて締めつけてくるよ……！」

「えへ……そりゃ、陸上部で鍛えてますから……。つあ、あんっ！　ソコいじられると、力が抜けちゃう……。くふっ、あ、はああ、キス、して……」

茶目っ気のある答えと嬌声の混じった言葉に、遠慮はいらないという彼女の思いが伝わってくる。痛みを紛らわすためにさっきから真也がしていたことを理解しているのだ。

「ううっ、奈津美いいっ！」

後ろめたさのまったくない純粹な睦み合いは、真也の中で恋人への愛しさに変わる。

これが恋人同士のセックスなんだということを実感しながら、男性器の奥に疼く高まりを解放するために腰を動かし始めていた。

ずりゅるるるっ、くちゅ！　ずりゅりゅっ……！

ずりりと奥まで。ぬめりをかき混ぜてから一気に引き抜いていく。膣壁の凹凸が愛液を絡ませて貼りついてはぐにゅりと蠢き、膣口付近はペニスを挟み込んでうねる。

「あつ、はあむ……ふう、もつと、奥までえ……つ」

奈津美も同じ幸福感に包まれて、うつとりと眉尻を下げた表情に戻っていく。痛みさえも快楽に変えそうな抽送の充実感に胸を疼かせ、吐息を乱れさせて。くっついては離れる唇からは、鼻にかかる甘やかな声と切羽詰まった嬌声とが代わりばんこに溢れ出す。

ぶぢゅ……にゅるっ、くちっ、ぶぢゅううっ！

膣内はひと突きごとに柔らかさを増して、なのに締めつけは衰えることもなく。ペニスへの締めつけに絡みつく動きも混ざって、蠢動する膣壁がぐちぐちと音を立てている。

「ふああ、んっ、く！ うあ……すごいよ真也あ……、なんだか気持ちよくなつてきちゃった……。つはあ、うんっ、ふうう……っ！」

ほっそりした肢体をくねらせ、乳房をぶるぶると跳ねさせている少女の姿を目にして、肉棒はドクリと脈を打つ。

握り込んだ乳房にも柔らかさが増している気がして、めちやくちやにしてやりたい欲望が抑えられない。さつきまでは「恋人のために俺が」なんて余裕があったはずなのに、いつの間にやら崖っぷちに立たされている気分だ。

「ううっ、奈津美の中が気持ちよすぎて、俺、なんかもう……ダメかも」

両手で乳房を押し包んでぎゅっとしがみつくように抱きしめながら、ぐいっとな腰を持ち上げるような角度の突き込み。奥に到達した亀頭がカリ首のあたりをぐちっとな締めつけられて、あまりの気持ちよさに呻きを上げてしまいう。

「ふうっ、ンあ……！　いいよっ、中で出しているから……、つふう、うううんっ！　お、思いきり動いていいから……！　ボクも気持ちいいよおっ！」

ぐにゅつとひしゃげてかき回された膣肉が、すぐにぴつたりと貼りついてきて舐めしやぶるように蠕動する。奈津美の身体もすっかり蕩けていて、真也の突き込みをしつかり受け止めてくれるようになっていた。そんな反応を見ると、初めてのくせに「気持ちいい」なんて言っているのもあながち嘘ではないかもしれない。

そつと頬に手を添えると嬉しそうに頬ずりしてきたりして……。

（ああもう、今日はいつともより愛らしいなあ！　しかも意外に甘えんぼじゃないかつ）
シスコン兄としての隠れたツボをくすぐられた気がして、腰の動きもペニスの脈動も一気に速まってしまう。

「ひゃうんっ！　はあ、んふふっ、急におつきくなつたみたい……っふう！　ねっ、真也が中でビクビクしてるよ……あつ、つはあ、んふう、んんんっ！」

「そ、そんなこと言う余裕があるなら、もう遠慮なしだからな。はあ、はあ……突いて突いて突きまくってやるぞ……！」

ぐちゅ！　ぬぷぷ……ちゅぷっ！　くちっ、ぬちちっ、ずりゅううっ！
「ふああっ！　すごいよ真也あ！」

二人だけの世界を作って、激しい抽送に身も心も委ねていく。
挿入の角度は一回ごとに変化してでたらめなのに、奈津美はしつかりと動きを合わせて



くる。上向きに突き上げれば腰を浮かせて中で締めつけ、下向きに引き抜けばしがみついて膣ヒダをまとわりつかせてきて。本人は小さいと気にしている乳房を思いきり真也に押しつけては、ぷにゅぷにゅした感覚と先端の尖りの感触を刻みつける。

「あつ、あはあ……んっ！　ふう、んん……あ」

射精を求めるような眼差しにゾクリとさせられ、耳に吹きかけられる吐息に欲情を煽られる。ペニスの中をざわりとした感覚が駆け抜けていった。

（うっ、これはもう、出そう……!）

ぐちゅつと奥まで突き入れたところで、膣口のペニス根本への強烈な締めつけ。腰の奥の疼きがぎゅつと収縮し、すぐにぶわりと膨れ上がって――。

「な、奈津美いいっ!」

膣肉が絞り込むようにきゅううつと狭まってきて、ねっとりした感触で肉胴を撫で上げられ……痺れを追いかけるようにして精液が駆け上がってくる。

ざわざわした感覚に頭の中が白んでいつて……バチツと弾けた。

「出るぞっ!　奈津美のなかにいいっ!」

濁流は膣口の締めつけで一瞬だけ流れを止め、すぐに堰を破るような勢いで噴出。

ぶちゅううつ!　どぶぶぶぶっ!　どくどくどぶぶぶっ!　どぶううううつ!

「ふあつ——真也ああああつ!　奥につ、あああああ……っ!!」

絶叫した奈津美が息を止めてしがみついてくる。

真也は止まらない射精の最中にあるペニスをこれ以上ないほど押し込んで。子宮をコリコリと擦り上げながら吐き出し続ける。

そのままたっぷり数十秒……。

「あつ、んんっ！ はあつ、う！ ひゃ……あああ……」

ふるふるっ……と全身に震えを走らせてから、奈津美がやつと息を吐き出した。

「うあああ……気持ちよかった……」

真也もようやく脱力して覆い被さっていく。

抱き合うように身体を重ねて、息を整えながらその充足感をたっぷりと味わう――。

（なんだろう、すごく幸せな気分だ……）

肉欲と一緒に心まで満たされるのは、この上もなく心地いい。しみじみと思う。なんだからもう、このまま死んでしまってもいいような安らぎだ……。

（うん、そうだな……）

経緯はともかく、恋人とのセックスを経験して、真也はとある決意をした。

（やつぱり、雪乃の好意に甘えっぱなしっていうのはダメだ……）

確かに奈津美に迷惑をかけるのはよくないが、もうすでに迷惑かけてしまったというか、そもそも恋人同士だし迷惑じゃないのでは、ということに遅まきながら確信を持った。

そうなるとむしろ、可愛い妹に面倒をかけていることこそ心苦しい。そもそも最近は行為が行きすぎている感があるし……ちよつと嬉しいけれど、やつぱり困る。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価/690円(税込)



全国書店で
好評
発売中



「…藤田君は責任取るべき」

睦月への想いに身を焦がすマキナ
彼女は夜の教室で……!?

思春期なアダム3 一人泣きの子猫

【小説…さかき傘 / 挿絵…天海雪乃】



全国書店で
好評
発売中



「当方Mドレイ希望」

魔界最強のプリンセスがドレイ志願!?

不死の吸血姫がドSのご主人様を募集
しているようです

【小説…酒井仁 / 挿絵…にのこ】



女幹部メル様の
セカイ征服計画!

【小説…高岡智空 / 挿絵…鈴眼依縫】

全国書店で
好評
発売中



悪の秘密結社vs正義のヒーロー
イケない戦いの記録!

既刊LINEUP ● 仙酔子艶姫姫ノブナガツ ①～③
● 純魔(帝都少女探偵団) 赤い謀略を撃て!
● BLANGEL 輪になりにて語る悪者の夜

● 借金お嬢小姐 ①～③
● プリンセスリバーシ! 交錯する美姫と魔姫
● 無敵の姫騎士が4MICに目覚めたようです

● ビルグリムメイデン ①～②
● 歌組俺らい部【カースイーター】
● 魔海少女ルレイエル

K&C 発行 ©株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコビル TEL:03-3555-3431 (販売) FAX:03-3551-1208

最新情報は公式サイトへ! あとみっく文庫

検索

http://ktcom.jp/index2.htm

KTC - KILL TIME COMMUNICATION...

おかげ様で46期!

国内最大級のダウンロードショップ! ゲームのダウンロード販売はここからどうぞ!

ほしいものちょっとつかも...

会社概要 通販ご利用方法 広告掲載案内 お問い合わせ プライバシーポリシー

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

コミックアンリアル
コミックアンリアル
アンリアル
検索

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利! 来かねる場合がございます。お問い合わせください。場合、お手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部のお楽しみBlogも更新中!

最新情報満載!

最新情報満載!!

フルテキストライトはこちら!

ゲーム化!

ゲーム化!!

Valkyrie

http://www.comic-alkyrie.com/

cranberry

http://www.cran-berry.com/

mille-feuille
ミルフィーユ

http://www.mille-feuille.jp/

モバイル二次元
ドリーム

http://www.2d-dream.jp/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!